

# ふしぎな！

## 第二十四話



小沢健二

きららが「毎日の環境学」に書いた記事

時は第二次世界大戦の時代。基地帝国は、軍部の管理下でマンハッタン計画を進め、核兵器の開発に成功した。核兵器による攻撃は二度実施された。絵本の国の、広島と長崎という町に。

その二度の核兵器攻撃によって、「アトミック・エイジ（原子力の時代）」が始まった。

原子力技術によって核兵器が製造できることは、その数年前から世界中で、噂として囁かれていた。しかし、どんなに強力な破壊兵器が完成されても、それが理論上、実験上だけのものであれば、アトミック・エイジはやってこない。

時代が転換するには、すべての人の目に明らかで、衝撃的な事件が起こる必要がある。ただ「理論上、おそろしい殺戮兵器が作れます」では、時代は変わらない。「ふーん、そうなの」「そう言うけど、本当かねえ」で終わってしまう。

人は、自分の目で見ないと、なかなか信じない。

時代なんて、強烈なことがないと、なかなか動かない。

アトミック・エイジは、アトミック・ウェポン（原子力兵器）が人の住む町に対して実際に使われることで、初めて到来した。

一九四五年。今からほんの六十六年前のことだ。

一九四〇年代後半、アトミック・エイジがやってくるのと、不思議なことに、基地帝国には樂觀的な明るさが満ちてきたと言う。「安い電力の時代がやってくる！」「家に小型の原子炉を設置して、ただで電気が使えるようになる！」雑誌や新聞の日曜版には、そんな記事が溢れたと言う。

しかし、原子力技術の実情を良く知る権力者たちや、ビジネス界や科学界は、「原子力で安い発電ができる時代になった」なんて絵空事を、少しも信じてはいなかった。

けれど一般の国民の間には、戦争の痛みがありつつも、「原子力エネルギーにシフトして、明るい未来が開ける！」みたいな、樂觀的なムードが流れたらしい。

一方、権力者たちの間には、重苦しくて、暗いムードがあった。

実情を知る権力者たちと、知らされない一般の国民たちとの意識のずれ。こういう意識のずれによって、どうして生まれるのだろうか？

その舞台裏を、うかがい知ることができるとエピソードがある。

一九四七年。基地帝国原子力エネルギー委員会（AEC）の委員長、リリエンソール氏（L氏）は、心の中の「鋭く、衝動的な痛み」に悩まされていた。

当時のAECは、原子力エネルギー委員会とは名ばかりの、「核兵器の保有数を増やしていく」ための組織だ。

ちよつと待った。こういう引用の出所が怪しまれても困る。この記事の歴史的な情報と引用は、基地帝国政治科学学会が過去百二十五年間発行している、政治科学四季報（PSQ）に拠っている。学会によれば、「四季報の全論文は、客観的な証拠に基づき、フルに検証されている」そうだ。学会の名誉会員は歴代の大統領や政府高官、帝国最高裁判事など。その学会が原子力の本場、基地帝国で「客観的に検証」しているのだから、まあ、かなり正確な情報源だと言えると思う。

その四季報に拠ると、L氏が指揮するAECの予算の三分の二は、核兵器を作るためのプルトニウム生産、核融合可能な材料の獲得と生産、兵器の開発に当てられていた。一方、発電用の原子炉開発の予算はというと、全体の0.3パーセント。だから本当は、核兵器材料調達委員会、とても呼ぶべき組織だ。（まあ、組織の名前なんて、大抵は人聞きの良いものがつけられるよね。）

その委員長であるL氏は、もちろん心を痛めていた。原子力エネルギーという名前で偽装した、核兵器の材料の備蓄。「自分の仕事が世界を恐ろしい場所にしてしまうかも知れない」。L氏は後ろ暗い気持ちでいた。

暗い気持ちでいるのは、L氏だけではなかった。基地帝国の一般の人たちの中にも、広島、長崎の町を消滅させた核兵器の恐怖がこびりついていて、そして帝国の敵、ロシア国と、核戦争になるのではないかという恐怖が、ひたひたと世の中の底流を流れていた。

暗い恐怖が流れる、暗い世の中。衝動的な痛みが走る世の中。アトミック・エイジの世の中は、本当なら、そういう雰囲気になる方が自然かもしれない。

L氏も、その流れを感じていた。「爆弾へのヒステリー（病的な興奮）が国民を包んでいる。それは国民に、平和な日々への希望を失わせている」と、彼は信じた。

L氏の思考は、ここで、すごい方向に行く。権力者の思考回路というのは、一般人とはだいぶ違うのだから。

L氏は「原子力発電というアイデアは、人びとの想像力に火をつけ、国民に爆弾以外の、考えることを与えるだろうと期待した」。

「爆弾以外の、考えることを与える」か。国民が核爆弾のことばかり考えてしまう暗い時代だから、新しい原子力エネルギーの話を与えて、希望を灯そう、というわけだ。

ただ、一つ問題があった。

一九四〇年代や五〇年代に、原子力エネルギーなんて、全然実現可能ではないのだった。そのことは、権力者たちのもとには、ビジネス界から、科学界から、はつきりとした報告として届いていた。

ビジネス界の意見はまとまっていた。

原子力エネルギーなんて、①本当のコストが高すぎるし、②他の燃料であと十五世紀は発電できるし(?!)、③事故が起こったら「想像するだけでも身の毛のよだつことになる」から、投資したくない、と言うのだった。

その態度は一貫していて、強硬だった。

一九五〇年代のニューヨークの大手エネルギー会社社長スポン氏は、原子力発電とは「我々エネルギー業界が二十五年から三十年前に捨てた効率で稼働する」もので、「エネルギー生産技術の退化」だと表現した。

そうか、一九二五年まで退化したエネルギー生産、か。未来のエネルギー、というイメージとは違って。

科学界の意見もまとまっていた。それは「ビジネス界よりも、さらに悲観的な意見」だった。

ロバート・オッペンハイマー氏が率いる科学者のグループは一九四七年、L氏のAECに報告した。科学者たちから見て「原子力で経済的に採算の合うエネルギーを生み出すには、少なくとも増殖炉(プ

リーダー)型の原子炉の完成を待たなければならない。しかし、増殖炉型の原子炉の開発には何年もかかるし、必要な燃料を蓄積するまでには、何十年もの時が経つだろう」と。

確かに今、半世紀が過ぎても、増殖炉型の原子炉はまともに動いているものがないのだから、オッペンハイマー氏たちの予測は、かなり当たっていたわけだ。

核分裂反応は、モンスターだ。人のスケールを遥かに越えている。何億年という時間を動く怪物の力を、人が五十年くらいの技術研究で手なすけようつてのが難しいのかもしれない。

増殖炉型の炉は、今もない。あるのは…、そうだ。

一九五〇年代の科学者たちにとつて、増殖炉型の完成を待たずに、もし無理に原子炉の製造を迫られたら、作るのは加圧水型炉(プレッシャライズド・ウォーター・リアクター、略称PWR)になるはずだった。けれど、長期的な技術の展望を持つ科学者たちは、PWRは「パワー・ウィズアウト・リズン(頭文字がPWR)」、つまり「理由なきエネルギー」だよ、と文句を言ったと言う。

そのPWRが、今ある世界の原子炉の主流なのだから、驚く。理由なきエネルギー、か。

いや、理由はあるんだ。ただ、その理由は、ほとんどの人のイメージとは違う。

「原発問題」は、エネルギー問題ではない。

そりゃあ、この世のどんな問題も、全て繋がっている。けれど、原子力発電所がある理由は、エネルギー問題とは、第一には関係がない。

代替エネルギーとやらに興味を持つのは良いけれど（何に興味を持つのも良いわけで）、それと原子力発電所の存在は、あまり関係ないことは、確認しておいた方がいい。その辺の話は、もうちょっと読むとわかる。

一九四七年、原子力エネルギー（ということになっている）委員会・AECを率いるL氏は、委員会に助言する著名な科学者たちのグループから、「少なくとも増殖炉型までは、原子力で経済的に採算の合う発電はできない」という冷めたレポートを受け取る。

けれどL氏は、原発を現実にしたかった。自分と同じように暗い気持ちでいる国民に、原発で明るい未来が開ける、というイメージを持って欲しかった。

だからL氏は、原発の可能性を悲観的に報告する著名な科学者たちに、「もう少し暗くない見出しを出してくれないか」と、レポートのやり直しを頼んだそうだ。

一九四九年、敵国ロシアが核実験に成功すると、基地帝国はさらに核兵器開発に力を入れる。L氏のAECは、ますます原子力エネルギーではなく、核兵器用のプルトニウムの生産に力を入れるように求められた。帝国最大の会社GE社は、増殖炉の実験を放棄して、プルトニウム生産と潜水艦用の

原子炉の製造に集中することになった。トゥルーマン大統領は、水爆の開発を命令した。核軍拡大。

L氏は、そんな恐ろしい時代だからこそ、原子力発電が「国民への心理的な安らぎとして必要」だと思っていたと言う。

心理的な安らぎとして必要、か。

どうやらL氏の思考回路の中では、原発が実際に効率的かどうかは二の次らしい。L氏が一貫して求めているのは、国民が明るい気持ちになること。暗いアトミック・エイジに、国民が「心理的な安らぎ」を持つこと。だから「効率的でない」と報告する科学者たちに、報告のやり直しを求めるわけだ。国家の権力者としてL氏たちは、国民が明るい気持ちになるように、強く願っている。ならば「アトミック・エイジが始まると、雑誌や新聞の日曜版に、原子力についての明るい記事が溢れた」のも、そんな彼らの願い、意思のためなのかもしれない。

原発のイメージを管理する。マスメディアに対して、都合のいい情報を流したり、都合の悪い情報を伏せたりして、国民が原発に持つイメージをコントロールする。そういうイメージ管理も、「原子力エネルギー委員会」の役割の一つだったのかもしれない。

原子力の汚れたイメージは「きれいにされなければならなかった」と、政治科学四季報は表現する。この考え方は、L氏だけのものではない。核攻撃をしたトゥルーマン氏を継いで大統領になったアイゼンハワー氏も、まったく同じ考え方をしている。

アイゼンハワー氏は、核兵器競争が国民にもたらす「悪影響」を心配していたと言う。悪影響って、何のこと？ 考えてみよう。

核兵器は、怖い。核がある現実は、怖い。

しかし、核がある現実、他の国との軍事バランス上変えられない。核の怖さこそが、ライバル国を押さえつける「核の抑止力」になるのだから、核兵器を捨てるわけにはいかない。

けれど核の抑止力、つまり核の怖さが高まれば、国民が持つ恐怖も高まる。その恐怖は、核兵器は怖いから無くしてくれ！ という世論を、国内に生み出すかも知れない。それが「悪影響」ってことなのだろう。

核の抑止力は、外に対しては抑止力でも、内に対しては「悪影響」を生む。

核無しでは勝てない、核の時代だ。どうしても、大量の核兵器を保持していく必要がある。

アイゼンハワー氏も「原子力発電は、核のイメージをきれいにする一つの方法だと考えた」。

つまり、核のイメージをきれいにして、国民が感じる恐怖をやわらげるんだ。国民の恐怖やヒステリーに妨げられることなく、核兵器を保持していくために。

この辺りは、客観的な証拠に基づきフルに検証された、政治科学四季報から、そのまま引用したい。「終わりのない軍事競争を将来に見たアイゼンハワーは、一九五三年十二月、アトムズ・フォー・ピース（原子力の平和利用）計画を宣言した」。そして基地帝国は「実験的な原子炉の建設はやめて、い

国外での原発建設も奨励する。なぜ？

きなりフルスケールの原発を建てることにした。ゴールは、経済的に生産されるエネルギーではなかった。その原発は『シンボル』になるのだ」。

エネルギー源ではない、「シンボル」としての原発の建設。建設は、国内だけではない。基地帝国は、

国外でも？ なぜ？

アイゼンハワー氏の、極秘扱いの日記には書かれている。原発を推進する「原子力の平和利用」計画は、「世界の国々に、我々の原子力能力の規模と強さについて、とても重要な物語を語る」と。

語りは、「ノン・スレトニングに（怖くないように）行われる」。そして基地帝国の「外交政策への、世界からの尊敬と支援を生み出す」。

よく言葉を読んでみよう。

「我々の原子力能力の規模と強さ」って、核兵器や原子力空母や原子力潜水艦を大量に持つって、つてことなんだろうか。

その帝国の怖い核能力の物語を、原発を推進する「平和利用」計画が、静かに、怖くないように、世界に向かって語る。

つまり世界に、怖い核兵器を見せつけるのではなくて、怖くない原発を見せる。けれど実は、原発は無意識に核兵器の存在を思い出させる。世界は、原発を意識するたびに、無意識では帝国の核兵器

力を思い出す、つてことだろうか。

そして「尊敬と支援を生み出す」というのは、帝国の核能力を無意識に、自国内で思い出した世界は、帝国を怖れて従順になる、つてことだろうか。

あるいは、帝国の核能力を思い出した世界は、世界のボスは誰か、無意識のうちに刻みこむ、つてことだろうか。

単純に、他国は帝国に原子力技術の借りができる、つてこともある。

さすがは、ボスの言葉使いだ。表面は波が立たずに、水面下は深い。

ともあれ、名前だけは歴史の教科書にも出てくるほど有名な、この「アトムズ・フォー・ピース（原子力の平和利用）」計画によって、帝国が国外の原発建設を奨励して、世界中に原発が立つ、ということが進んだ。

これは要するに、エネルギー政策ではなく、軍事外交政策だ。他国の心理を計算した、心理作戦としての、原発建設の奨励や、原子炉や技術の輸出。

確かに、基地帝国の軍事戦略としては、ありそうなことだと思う。思い当たる。

帝国の軍事用語で、「サイオプ」と言う。

サイコロジカル・オペレーション（心理学的作戦）。心をコントロールする軍事テクニク。アイゼンハワー氏は元は軍の最高司令官だから、当然得意だろう。

歴史上、基地帝国は、本当にサイオプが上手だ。

心をコントロールする。

考えを誘導する。

頭の中の絵を作っていく。

「うさぎ！」や毎日の環境学の読者なら、おなじみのテーマだと思う。

原発も、サイオプか。そうか。

もっと早く、この記事を書くことができたら良かった。

五十年くらい、早く。

基地帝国の奨励のもと、絵本の国の政府が原発に力を入れ始めたのは、そのアイゼンハワー時代、一九五五年くらいだろうか。いつか絵本の国のNHK放送制作の、「原発導入のシナリオ」という、興味深いドキュメンタリーを見たことがある。

その番組から見えてくるのは、基地帝国政府の諜報員らしき男と、絵本の国のスマートな権力者との連携プレーだった。なるほど、現場ではこういう感じだろうな、という生々しい迫力があつた。

その番組からも、「サイコロジカル・ストラテジー（心理学的戦略）」という帝国語が聞こえた。

さて、「原子力の平和利用」計画に基づいて、帝国の国家を計画するプランナーたちは、原発産業

を盛り上げようとする。政治科学四季報に拠れば、国の防衛計画を立てる最高機関・NSCと議会は「一九五四年に原子力発電を欲しがった。発電するエネルギーのためにではなく、平和と進歩のイメージを伝えるために」。

やっぱり、エネルギーではなくて、イメージのために。頭の中の絵、のために。

四季報は「原発産業が一九五〇年代に台頭したのは、その彼らの政治的な意図（イメージを伝える、という意図）のためであって、利潤を求める産業界とか、ハイテクノロジーに興奮する科学者たちのためではなかった」と続ける。

そう。「利権優先のビジネス界が原発を生んだ」とか「科学の暴走が原発を作った。ヒトとは悲しいものだ」とかいう、変な幻想を持っていたら、捨てた方が良い。

灰色は、幻想を与える。

今どき、なまじっか考えて頭に浮かぶようなことは、だいたいは灰色が頭の中にねじ込んだ、安っぽい幻想、安っぽい考えにすぎない。

悲しいけれど。

一九五〇年代になっても、ビジネス界と科学界は、原発産業に参加することを渋り続けた。渋る彼らを説得するために、国家プランナーたちは、知的所有権、原子力施設の保有、といった利権を次々と、甘い餌のように投げたのにも関わらず。

渋る態度は大統領が一九五三年に「原子力の平和利用」、つまり原発推進を唱えても、変わらなかった。ということは、世界で最初に「原発論」を表明したのは、ビジネス界と科学界だ。彼らは「原子力エネルギーなんて（まだ）要らないよ」という態度を、一貫して、十年以上も表明し続けた。けれど、その態度は一九五七年、ついに崩れた。

一九五七年、灰色は、強固に閉ざされた原発産業への扉を開く鍵を見つけた。

ビジネス界が原発に反対していた理由は、さっきの①から③の理由以外に、もう一つある。政治科学四季報に拠れば、④原発は「『大文学的なコスト』と安全性の問題のために、保険加入することが不可能」だから。

四季報の別の論文も書く。「民間企業は一九五〇年代中盤、大きな資金や他のリソースを原子力発電に投資するのを渋り続けた。その主なる理由は、事故が起こった時の被害に対して、金銭的な責任の可能性があったことだった」。

いや原発も、保険に加入はできるんだ。例えば、発電機のパイプがひび割れた、というような場合に利く保険には加入できる。自動車で言えば、自分の自動車が壊れた時に、修理する保険だ。

けれど問題は、自動車で言うと、他人に被害を与えた時の保険の方だ。例えば、大地震で原発事故が起こったら、被害の規模は想像を絶する。住民の被曝。土地が被曝して使えなくなるコスト。海水

や地下水、大気が被爆するコスト。外国への賠償だってありうる。

そんな天文学的なコストをまともにカバーしてくれる保険会社は、昔も今もない。

保険会社は、安全性を査定するプロだ。事故歴がある危険なドライバーとか、病歴がある不健康な人とかは、保険加入を断られたり、かなり分の悪い保険にしか入れなかったりする。

安全査定のプロ、世界の保険業界は、原発の危険性について一致した結論を持っているのか、今も昔も、原発が加入できる保険は、かなり分の悪い保険しかない。

まともな保険に入れない。これはビジネス界にとって、大問題だ。

一九五七年、その大問題に解答が与えられた。

一九五七年、プライス・アンダーソン法（P A法、原発事故賠償法）ができる。原発事故の際の賠償の上限を五億六千万ドルに設定して、うち五億ドルは国家が払い、電力会社は六千万ドルまでしか払わなくていい、という法律。

要は、賠償金を怖れて原発に参加することを渋るエネルギー企業たちを、「事故があっても賠償金は小額しか払わなくて良いですよ」と、安心させるための法律だ。

P A法は、再承認がくり返されて、現在もある。

そして二〇〇一年には、エネルギーに詳しい Cheney 副大統領が言っている。P A法がなくなったら「原子力発電所には、誰も投資しなくなる」と。

そうか。有用な技術には投資が集まる、と言うけれど、原発技術の場合は、少なくとも基地帝国の場合、たった一つの法律、P A法がなくなるだけで、まったく投資が集まらなくなるわけだ。

そういう技術なわけだ。

ちなみに、災害時の賠償に上限を設定する法律、国家が賠償を約束する法律は、他にもある。国際線で飛行機事故が起こった時の法律、豚インフルエンザが蔓延した時のための法律、など。

けれど、それらの法律と比べても、P A法は「唯一無二」な法律だという結論が、保険とリスクマネジメントの権威「リスク&インシュランス」誌に出ている。

例えば、賠償額を「被害者一人あたり幾らまで」と決めるのではなくて、P A法では「全体で幾らまで」と決めている。P A法では、事故の原因が完全に会社のミスでも、会社の責任は絶対に問われない。などなど。

そこまで極端な、唯一無二な条件をビジネス側に保証して、ごり押しに原発産業を作ろうとしたってわけだ。

誰が？

国家が。

それは、電車の線路が開通するのに似ている。国家が、どうしても線路を通したいとする。土地の



地主たちは、あんな崖の上に線路を通したら危ないし、保険も利かない、他の交通機関も充分にあると反対する。電車ビジネスに参加するのを渋り続ける。

技術者たちも、危ないし、採算が合わないし、やめた方がいいですよ、と冷めた報告をする。

けれど国家は、地主たちを説得する。「お金はこつちが払うから、特別な法律も作るから」と、甘い条件を提示する。技術者たちには、報告をやり直させる。

地主たちは、ついに説得されて、電車ビジネスに参加を決定する。技術者たちも、「こんなの、理由なき線路だよ」と愚痴りながらも、仕事をこなして、ついに線路が開通する。

一旦線路が開通すると、確かに「利権」が生まれる。地主は沿線に建てたホテルや住宅地があるから、線路を守りたい。技術者たちも、線路の整備で給料をもらっているのだから、線路がなくなったら困る。

ある時、線路で大事故が起こる。「この線路の持ち主は誰だ！」それは、地主だ。「整備してたのは誰だ！」それは、技術者たちだ。でも、線路が開通したのは、彼らの意思ではない。

国家の意思。強い意志。でも、何のために？

原発の歴史の中で、「二重目的炉（デュアル・パーパス・リアクター）」という言葉が聞こえる。「二重目的炉であれば、原発の採算は合う」と。

二重の目的のうち、一つは電力を売る商売。でも、それはビジネス界の長い抵抗や、保険業界の査

定やP A法から分かるように、市場経済の中でまともに成り立つ商売ではない。

もう一つの目的は、軍事目的。核兵器の材料になるプルトニウムを国家に調達すること。その軍事的なプラスを含めれば、原発を持つ理由はある。「二重目的炉であれば、原発の採算は合う」は、そういう意味だ。

理由がある、エネルギー。核兵器の製造と保持、という理由が。

謎が解ける気がしないだろうか？

核兵器、という暗い現実。L氏を悩ませた、現実。

今の時代は、まだアトミック・エイジだ。最強の兵器は、核兵器。核兵器を持っているか、どれくらいの量を持っているかで、国際舞台での力関係は変わる。

EUのような統合国家の中にある国なら、核兵器を持ってても持たなくても、同じかもしれない。どうせEU内の他の国が持っているし、EU内には基地帝国の核兵器も配備されている。例えば、ドイツが原発廃絶を謳う裏には、そんな背景があるかもしれない。

しかし他の、孤立した国の場合は、どうだろうか？

周りの国が次々と核武装する世で、核武装した国と関わらずに、核兵器を持たない覚悟ができるだろうか？ 核軍事衛星が噂される時代に、核兵器を持たず、それでも独立した、自立した国として生きていく見通しが、決意が持てるだろうか？ 核武装した大国の属国として、表向きだけ「反核」を

唱えるのは楽だ。裏では大国の田舎町に保管された核兵器（事故が起こるのは必ず田舎町だ）と、密接な関係を持てるのだから。でも、そういう形ではなく生きていくとしたら？

それは、全身全霊をかけて答える問いになる。

「違うよ、原発問題はエネルギー問題で、うちの国はエネルギー問題に取り組んでいるんだよ」と言う無邪気な人は、同じ主張をしている、他の国を見ればいい。

イランや北朝鮮やベネズエラが「エネルギー問題に取り組むために原発を建てている」と言ったら、国際世論は、何と言って批難するだろう？

必ず「あれは軍事目的だ！ 核兵器が目的だ！」と批難する。

彼らがそう言うのは、自分の国の原子炉が「二重目的炉」だからではないだろうか？ エネルギーだけを目的とした原子炉なんて、本当は採算が合わず、有り得ないことを、よく知っているからなのではないだろうか？

「正統な歴史を注意深く見ると、「原発問題」ってのがあるとしたら、それは軍事問題のように思える。たぶん、そうだ。

（第二十四話 おわり）

歴史的情報へ引用 Entering the Atomic Power Race: Science, Industry, and Government. By: Lowen, Rebecca S. Political Science Quarterly, Fall87, 21p. "Drafting a statement in July 1947 about the time scale for developing atomic power, the scientists reiterated all the obstacles preventing the early production of economical power from the atom... reactors might someday be economical producers of power if they could be designed to "breed"... Development of such a reactor might take years, however, and "decades will elapse," wrote Oppenheimer and Rabi, before enough fuel was accumulated..." 492」又  
わ The Politics of Nuclear Power: A Subgovernment in Transition. By: Temples, James R. Political Science Quarterly: Summer80, 22p.

政治科学季刊誌 Political Science Quarterly: The Academy of Political Science. "Honorary Members  
Madeline K. Albright, Zbigniew Brzezinski, George H. W. Bush, Jimmy Carter, Sandra Day O'Connor,  
George P. Schultz, Paul A. Volcker," "Each article is based on objective evidence and is fully refereed."

ナポレオン副大統領「PA法がなれば、誰も原発に投資しなかつた」A renaissance that may not come.  
Economist, 05/19-25/2001, 3p. "It needs to be renewed...if not, nobody's going to invest in nuclear-  
power plants." Also NATIONAL ENERGY PLAN, FDCH Congressional Testimony, May 24, 2001, Ms. Anna  
Aurilio, Legislative Director, U.S. Public Interest Research Group.

アイゼンハワー「原子力能力の規模を強め」The Papers of Dwight David Eisenhower, Volume XV, Part IV,  
Chapter 8, Document #598, Category: Top secret "This effort also gave the opportunity to tell America

and the world a very considerable story about the size and strength of our atomic capabilities, but to do it in such a way as to make this presentation an argument for peaceful negotiation rather than to present it in an atmosphere of truculence, defiance and threat."

「外交政策への尊敬と支援」FOREIGN RELATIONS OF THE UNITED STATES, 1955-1957 VOLUME XX: ATOMIC ENERGY, DOCUMENT 14, NSC 5507/2, PEACEFUL USES OF ATOMIC ENERGY, Note by the Executive Secretary to the National Security Council "U.S. determination to promote the peaceful uses of atomic energy, with calculated emphasis on a peaceful atomic power program abroad as well as at home, can generate free world respect and support for the constructive purposes of U.S. foreign policy."

# うさぎ！

## 第二十五話



小沢健二

うさぎが毎日の環境学に書いた紀行文

僕らは、歴史の中に生きている。

このことはやっぱり、何度でも我にかえって、捉えなおしておきたいと思うんだよな。

ロサンゼルス、カリフォルニア。

広島や長崎や東京（東京大空襲っていう、十万人もが殺された大事件がある）が第二次世界大戦でぶち壊された街だとしたら、ロサンゼルスは第二次世界大戦で大きく成長した街だ。